

## < 基調講演 >

### たまと玉作り

#### 一玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉一

梶山林継

梶山でございます。今日は、「たまと玉作り」ということで話をするようにということでございます。私もだいぶ年を取ってきまして、75歳を過ぎて、間もなく1月になると76歳なのですけれど、少し昔話をしろということなのですが、覚えていることと覚えてないことがあります。都合のいいことだけしか覚えてないという状態であります。

基本的には、皆様方いろいろなところで、いろいろなものをご覧になっていると思いますが、少し思い出しながら、はじめは玉の概説的なこととお話しして、その後少し、玉作りの実際に作っていたものを調査しておりますので、そのこととお話しし、さらに、「玉のまつり」と言いますか、玉だけではないのですが、まつりに関するようなことを、後でお話しさせていただくようにしたいと思います。

はじめに玉なのですが、日本人は、「たま」は玉ということで、だいたい丸いものはみんな玉なのです。「日本人は」と言ったのは、中国まで行きますと、四角い玉（ぎょく）もあるものですから、これはまたちょっと違うのですけれども、日本人が考えるのは、だいたい丸いものです。ところがです、その中で丸くないものがある。丸くないものの中の典型的なものが、いわゆる勾玉なのです。ご存知のとおり、勾玉というのは、丸みは持っています。しかし、いろんな言い方をします。コンマ型とかC字型とかいろいろ言うのですが、少し変な形をしています。これは、基本的には、日本の特徴のあるものであります。そこへ行くまでに、実は、これの原型は何だということがよく言われるのです。この原型は、動物の牙を玉にしたからだろうかというのが、1つの説であります。それから、もう1つは、そうではなくて、中国に「玦（けつ）」という玉（ぎょく）があります。玦というのは何かと言うと、丸いのですけれど片方が開いている、目の検査のときにどっちが開いているというのを、右だ、左だ、と言わせるああいうような形のもので、割合と平らで。そういう玦という玉があります。その玦という玉によく似たものが、実は縄文時代の早いころに、日本列島で出てくるのです。その玦に似たものですから、玦状、です。それで、それを何に使ったか。耳飾りだろうということなのです。耳に穴を開けて、それをぶ

ら下げるということで、今で言うピアス的なものであろうということなのですが、ちょっと入り口が開いている、どっちかに入り口が開いているものですが、薄いものですから、割れてしまう。半分にだいたい欠けてしまうのです。そうすると、しょうがないから、欠けたところに穴を開けて、また瑛のようにするか、そうでないと、その片方だけで、穴を開けていますので、ぶら下げれば使えるから使い始めた。ということで勾玉が出来たのではないかとする人もいます。このだいたい2通り、そのほかにもないことはないのですが、一応その辺から勾玉というのは出来てくるのではないかとされています。

これ（P5、図1）は皆さん（資料を）お持ちなのですよ。ある程度原稿を書けと言うから書きましたけれど、このとおりに話しませんのでご勘弁いただきたい。

日本列島で人が住み始めるのは、何万年か何十万年前かは分かりませんが、少なくとも土器を作り始めた、器を作り始めたとなると、縄文時代になってくるのです。器がなくても人間は、生活出来ないわけではない。木の葉っぱでもなんでも、器の代わりにする。万葉集では『家があれば 笥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る』と。今の椎の葉っぱなんて、ちっぽけな葉っぱでして、「あの上はどうやって盛るのだ」というふうに思うかもしれませんが、必ずしも今の椎が万葉時代の椎かどうか分かりませんが、今でも桜餅を食べたり、柏餅を食べたりすることを考えれば、あるいは朴葉味噌でもいいですけど、葉っぱを使って食事は出来る。そういうような葉っぱ類を使って食事も出来ますので、必ず土で焼いた器がなければ生活出来ないものではない。前に、ニューギニア高地人とかという記録映画で、彼らは、竹の筒で製塩を、塩を焼いているのです。そういうことも出来る。そういうようなことを考えますと、土器がなければ生活出来ないわけではないですけど、土器が出来始めますと、土で捏ねて作るものですから、そこにはいろんな思いが籠もってくるわけです。思いが籠もってきて、こんな形がいいとか、この形は使いにくいとか、あるいは、こんな絵を描いておこうとか、そういうことが出てきます。そうすると、縄文時代と言っているのは、その土器のある時代からなのですが、1万数千年前と言われています。この頃になりますと、表現されて、後に残されたものが多くなってきます。そして、基本的に生活が、以前は縄文時代というのは、あっち行ったりこっち行ったり、狩猟採集民だということで、食べるもののあるところを動いて生活しているというのが普通に言われていたのですけれど、最近では、必ずしもそうは言われていません。かなり定着性のあることも言われています。

その彼らが、集落を作り、生活し始めたときに、やはり着飾る。着飾るときに衣類だけ

ではなく、獣の皮やなんかも使っているのだと思いますが、それこそ、牙などを磨けばカッコいいということになるのだらうと思うのです。そして、動物の牙、あるいは鳥の骨、それらを結んで飾りにしていく。そういうことが行われ始めたのですね。

さらに、彼らはきれいな石を探し始める。そのきれいな石に穴を開けて、首にぶら下げる。それはきれいだ。翡翠は日本列島の中で、実はかなり古くから、新潟県の糸魚川周辺、富山県側もあるのですけれど、そこで取れている。そして、翡翠というのは鉱脈ではなくて、転石的にあるものですから、それが川に流れ出す。今でも糸魚川の小滝（をたき）というところのものは川の中ですけど天然記念物になっていますが、それが流れ出ていきますと、富山湾に流れていく。富山湾は、不思議なところでして、急に深くなって、いろんな魚もいるのですが、その富山湾からまた、その翡翠の石が海岸に上がってくる。重いから海の底へ、うんと底のほうへ沈んでいるのだらうと思うと、そうでもないのです。これも不思議な現象ですけども、富山県宮崎のヒスイ海岸で、毎日拾いに行けば落ちている。そう簡単に拾えるものではないのですけれど、めったにいい翡翠は拾えませんけれども、海の中できれいに磨かれて上がってくるものがある。これは、きれいなものだ。このきれいだというのは、人によって違うって言うかもしれませんが、だいたい多くの人が、きれいだ、すごい、いいものだ、と言うのは、だいたい似通ったものです。

この縄文時代の翡翠の玉、それに穴を開けるのです。翡翠の硬さって、皆さんご存知かもしれませんが、硬度7ぐらいという硬さなのですけど（資料 P26、図 2 参照）、「これが硬い鉄も何にも知らない縄文人が、なんで穴を開けられるのだ」と、昔はそういうことで、「いやあ、あれは鉄やなんかを知ってからではないと、出てくるはずがない」とかいろいろ言われていた。皆さんご存知のとおり、砥石は必ずしも硬くなくてもいいのです。包丁を研ぐのに砥石は必ずしも硬くなくていいのです。柔らかくてすり減っていいのです。翡翠も、砂と水と、あと何かで押し出すものがあれば、それでいいのです。その繰り返しをやればいい。縄文時代からすでに管切り、管状になったもので穴を開けるのですけれど、ですから翡翠の孔に、最後になると、へそが出てくるのですけれどね。へそが出てきて、回転させて、穴を開けていく。その砂は選んでいると思います。後の話ですけど、古墳時代になりますと、ほとんどの地域で奈良県の二上山の辺りの金剛砂を使っています。今はちょっと違っています。ブラックカーボンとか言っていますけれど、奈良県辺りの金剛砂を使っているのですね。これは、縄文時代は、ちょっと今は分かっていません。残っていたものがないので分かってないのですけれど、砂と水なのです。硬い石に砂と水で穴を

開けるのです。そして、ぶら下げている。

これは、みんながいろいろ言うものですから、新潟県辺で出てきたものを作って商売になるのです。関東地方にももちろんやってきます。ただ、やっぱり大きさはね、新潟県近辺のほうが大きいものがあります、だんだん遠くなるに従って、小さくなっていくのです、いずれにしてもそういうものです。縄文時代には、その勾玉に似ている塊状の耳飾り、その壊れたもの、あるいは、その翡翠で作ったそれをなぜか、これは明治以降の話なのですが、「大珠」、大きい、タマは「玉」編に「朱」という字を書いた。いわゆるタマはタマなのです、「珠」という字を使っています。なぜ、誰が最初に言い出したかは分かりませんが、今でも学術用語として、縄文の翡翠の「大珠」という言い方をしています。漢和辞典を後で引いてもらおうと、普通は玉（ぎょく）が石のタマで、珠と言うと海のタマだ、海のタマと言ったら、真珠になってしまうのですけれど。これもまた難しい問題でしてね、翡翠がさっき、海から上がってくると言いましたけど、それで翡翠は「珠」のほうのタマなのかどうかね、分かりませんがね。ともかく、そんなことで、翡翠の大珠というのは、縄文時代の一つの特徴のある玉であります。

それに対する研究がいくつもありますので、見ていただくといいと思います。縄文時代の玉の特徴は、今言った塊状耳飾りというものと、この大珠。そして、勾玉はたくさんありますし、それから、丸い玉ももちろんありますし、管玉、管玉と言っても、弥生時代以降のような正確に管状になっているものではないのですけれども、しかし、玉の種類を言いますと、もう縄文時代にほとんど揃っていると言ってもいいのです。私の先生の1人である樋口清之先生などは、「縄文時代にみんなあるよ」と言われていました。そういう玉があります。

時間があまりありませんから、短い間隔で話しますが、弥生時代の玉になると、今度はさっき言った管状のいわゆる管玉と言っているものが特徴的に出てきます。これは、朝鮮半島にもありますし、朝鮮半島から来たのだと言っている人があります。朝鮮半島から来たのが管玉であり、それが展開していくのだと、縄文時代にあると言ったのは、ちょっと形が崩れていますので、作り方も全く違うと思います。そういうことから、管玉が入ってくるのは、弥生時代だという。この弥生時代には、勾玉はもちろんありますが、翡翠の大珠は基本的にありません。

そういうことからして、弥生時代、弥生時代というのはどのぐらいあるか。今、佐倉の歴博の人たちなどが、3000年前からだと言われるのですが、なかなかこれは落ち着かない

というか、私などは、まだ本当には納得出来ないほうでして、2千数百年前からあることはいいのですが、3000年前までいくかなあと、これはちょっと首かしげています。そんな中で、弥生時代でも明らかになってくるのは、いわゆる中期と言われている時代。中期と言われているのが、だいたい今のところ、B.C.2百何十年前まで持っていくか、これも人によって違います。私なんか、古くしたらいいだろうと言って、250年ぐらいからと言っているのです。皆さん、考古学は少し怪しいなあと言うかもしれませんが、半分は眉毛にちょいと唾付けて聞きますと、だいたい大丈夫です。

弥生時代の特徴の1つは、佐渡を中心にした、佐渡の赤玉という石をご存知かと思うのですが、この鉄石英の石で管玉を作るのです。これがね、直径が3mmかそこらのところへ1mmの穴を開けたりするのです。これは非常に細かい仕事をしているのです。長さはいろいろなのですけれど、約1cmぐらいだと思えばいいのです、そういう赤い玉を作っています。これも非常に特徴のある玉で、この玉は北海道まで行っています。北海道では作っていません。佐渡か、佐渡の対岸で少々、ほとんどは佐渡なのですが、佐渡で作った玉が日本海、その当時は、まだ北前船はないのですけれども、北前船の元祖みたいなのがいて、東北地方から北海道まで持っていくのですね。これは弥生時代の後期へ入ってからののですが、そういうものが特徴的にあります。

その前に、碧玉の管玉が作られています。この碧玉の管玉というのは、弥生時代以降、ずっと古墳時代を通じてあるのですが、その一番の石は、島根県の松江市にある宍道湖の南側に花仙山という山があります。花仙山から出ている碧玉、いわゆる出雲石なのです、これは、よく今、土産屋で売っているのは、ほかから持って来た青メノウやなんかを売っていますけれど、青メノウではない。不透明なもの、透明ではないのです。その中でも、青黒い石を使って作っています。花仙山はめったに行かせないって言うか、いろいろ入れなくなっているのですけれど、危険性もありまして。この碧玉と言うのは、石炭やなんかと同じで鉱脈で入ってしまして、上から井戸掘りみたいにして掘って行って、途中でいいところにぶつかると、横に掘っていくというやり方をします。翡翠は、そんなことしたって駄目ですけどね。この花仙山の碧玉、青黒い不透明な石で管玉を作るのが、弥生時代から古墳時代へずっと繋がっていきます。これが、後で言う玉作りの基本的、中心的なものになっていきます。(近年では、出雲の石より北陸石川県産などの石が古くから使われ、玉作も北陸方面が古いとも言われている。)

弥生時代にはもう1つ特徴のあるものがあります。何かと言ったら、ガラスです。ガラ

スはどう見ても、大陸か半島を通じて、日本列島へ入って来たものだと思いますが、弥生時代のかなり古いころから小さなガラス玉があります。今、東南アジアへ旅行されると、今でもガラスを作っている村があったりします。このガラスというのは弥生時代から入るのですが、不思議なことに、弥生時代のガラスはだいたい鉛ガラスなのです。そして、そのガラスを弥生時代の人たち、勾玉に作り始める。ガラスの溶けるのは知っていますから、鋳型を作って流し込むのです。

この弥生時代の勾玉の形は、不思議なことに古墳時代の勾玉と非常によく似た形になっている。これを定形勾玉と言っています。勾玉と言っても、こういう形だけが勾玉ではないのです。何か分からないイモムシみたいなものや、いろんなものがあるのです。特に縄文時代はそれがいろいろありますけれど、弥生時代になってからでも、翡翠は硬いと言いましたけど、硬い翡翠の勾玉に穴をぶら下げるために開けるのですけれど、それだけではなくて、上から縦に長い距離をわざと穴を開けるのです。どうやって開けるのだと。そんなこと無理して、なんで開けるのだというようなくらいにやっています。これは弥生時代になってからも、しばらく出てきます。これは九州などでよく見られるものなのです。九州にもう1カ所、彼杵翡翠と言って長崎県から翡翠が取れるというのですが、私も追いかけてみたのですけれど、どうもよく分からない。分からないけど、あるということです。

ついでですけれども、日本には翡翠はまだ、福島県からもあるし、いろんな所に何カ所かある。ただし、古代人が製品にしているのは糸魚川周辺の翡翠と、彼杵翡翠というのがあるということなのです。それから、日本ではあと、宝石と言えるのはオパール、蛋白石があるのですけれど、これはほとんど製品にしてないだろうと言われていています。なぜ製品にしないかということは、後でまた、話さなくてはいけないことなのですが。

今、鉛ガラスだと言っていたのですけれど、鉛ガラスはだいたいが透き通っているのです。透き通ったガラスの玉を弥生時代は作るのですが、これは九州の遺跡から出ています。ただ、これが不思議なことに古墳時代になりますと、アルカリガラスというか、コバルトブルーあるいはスカイブルー、そういう色になってきてしまうのです。これは、鉛ガラスを使ってないのです。どっからかインゴットが、原料にするものが入ってくるのだと思いますけれどね。入り方が違うのかもしれませんが。古墳時代も、6世紀の後半になると、また鉛ガラスが入ってきます。関東地方などで横穴墓という山の中腹に穴が開いてお墓にしているものがあります。吉見百穴みたいなものですが、ああいうところの時代になりますと、また鉛ガラスが出てきます。

というようなことで、弥生時代までは、玉は玉でも少しずつ特徴を変えながら出てくる。しかし、みんな、身を飾るものとしていろいろなものを使って、工夫しながら作っていることも事実です。そして、古墳時代はもういろいろありますんで、どうにもなりません。後でまた、各県の方からの発表もありますから、なるべくそれを聞いてもらうようにして、古墳時代はいろいろあるというふうにだけ言っときます。

それらが流行らなくなってくるのはいつか？ これは聖徳太子の時代、6世紀の終わりがごろになってきますと、中国の隋の文化やなんかが入ってきます。このころになりますと、服装が変わってきます。今まで着ていたものが違ってきます。あるいは、男も、女も、髪型が違ってきます。髪型、衣類が違ってきますと、今度は服飾・装飾品が変わってくるわけです。この段階でかなり今までの古墳時代のものがガラッと変わってきます。これ（資料）の6ページに、「奈良時代に於ける玉の種類と用途」というのを、1ページそのまま入れさせてもらいました。石田茂作先生の「奈良時代に於ける玉の種類と用途」、本は昭和15年に出た『鏡・劔及玉の研究』という論文集です。この本、いい本でして、古本であつたらぜひ買うことをお勧めします。昭和15年というのは紀元2600年記念に出ているものなのですけれど、私の生まれた年だからいいと言っているだけではないのです。このころの論文集はかなり、みんな、しっかりしたものがあります。その後の戦争あるいは戦争後のものも悪いとはいいませんけれども、この15年ごろの論文集はなかなかの論文集ですから、今、古本で買ったってすごく安いものです。ぜひ、これはお勧めのものです。そこに見ますと、これ、皆さん、漢字が読めないかもしれません。今なら、かなで書きそうなものがみんな漢字で書いてあります。もちろん、これ、昔の本ですから右から左に読んでくださいね、左から右に読んじゃうと大変なのですけれど。コハクだろうと、トンボだろうと、みんな、漢字で書いてありますから。

こういう種類が出てくるのです、これらは基本的に人間の装身具というよりは、むしろ、ほとんどはお寺などの仏像とか、お寺の天蓋だとか、いろいろなものにあります。それから、正倉院などには、散華をするときの玉で作った薄いザルみたいなものがあります、ああいのようなものとか、そういうものにはたくさん出てきます。

ここにはあるかな、ないかな、真珠は縄文時代から使うのですけれども、しかし、真珠というのは溶けてしまうのですよね。太安万侶の墓から4粒の真珠が出たというのは、あれは少し首を傾げているのです、本来、溶けて、なくなってしまうのです。ですから、縄文時代の真珠があったというのは、東北で貝塚の中で2粒ぐらい出ています、そのほかで

古墳時代のものも、九州で1粒、2粒とあって、そういう状態です。宗像、沖ノ島からアワビの玉が出ています、これはアワビ真珠です。当時、アワビ真珠も、アコヤガイの真珠もたくさん使っていると思うのです、ほとんど残ってない。奈良・平安時代になりますと、三重県の志摩の国辺りからは税金として出させる真珠、1年間に1000個とか、2000個とか、こうやって出させるのですから、ミキモトの養殖真珠が始まらなくても、1000個や2000個は取れたのでしょけれどね。全部、それで納められたかどうかは、また？（クエスチョンマーク）なのですけれどね。

というようなことで、真珠はこのころになりますと残っています。東大寺の鎮壇具だとか、そういうものの中に真珠が入っています。ですから、もっと早くから使われていたのでしょうけれども、残っているものとすればこの時代のものがよく残っています。

現在でも、伊勢の神宮の御神宝の中には81顆ですか。「顆（か）」と言っていますけれど、1個、2個でもいいですけれど。これが2つの箱の中に分けて入っています。片方が奇数で、片方が偶数なのです。そういうようなものが宝物というか、装身具として使われてくる、基本的に多く残っているのは、この時代のものであります。

ということで、今でも皆さんもいろいろなものを飾りに使っていると思うのですが、これはまた後で言いますが、なぜ付けるかって。みんなにきれいだと言ってほしいのか、そこら辺のことはちょっと考えていただきたいと思います。

それらを作るメンバーというのは、いわゆる玉作と言っていますが、今日の話の半分は、本当は玉作の話なのですが、先程砂と水と何か工夫すれば、穴を開けられるといいました。穴が開けば玉かということ、奈良・平安時代はちょっと困るのですが、穴を開けない玉もあるのです。丸いまま、どうするのだと言ったら、糸で籠のように包んで、そして、腰にぶら下げているようなものもあるのです。純金の玉だとか、純銀の玉などが出てくるのはだいたい6世紀、飛鳥以降の話なのですけれど。そういう穴の開いてない玉も、玉は玉なのです。ともかく、砂と水があれば、穴が開くよと言いました、この砂と水に技術的なものが必要なのです。どうやってやるか。これは大変面倒な話です。例えば、硬い鉄がいいだろうと思うかもしれませんが、現在でも皆さんが実際にやってみようとするならば、生釘がいいのです。先に砂が付くような生くぎを、何かの小さなモーターがあれば、その先に付けて、水を補給しながら動かしていけば、穴が開くのです。しかし、さっき言ったように、弥生時代の管玉に、一方から開けるか両方から穴を開けるか、これもいろいろあるのです、とにかく穴を開けます。完全に出来てから穴を開けるわけではないのです、ある程度のと



きに穴を開けて失敗すれば、捨てるだけの話ですから、それでいいのです。数 cm、場合によっては 10cm 以上の長さの管玉があります。そういうものに穴を開けるのです。これはやはり、技術がいります。そして、玉作りというのは、石を細かく欠いていって周りを整えられればそれでもいいのかもしれませんが、必ず、擦り上げていって、そして、光沢を付けていきます。(自分の腰の勾玉を見せて) これは、まだ半光沢というか、光沢がないほうなのです。これは、私が作ってもらって、腰にいつもぶら下げているのは、私の命のほうが短いと思うのですが、実は翡翠の勾玉に擦り減っているのがあるのです、穴のところ。それはいったい、彼らは何の紐でぶら下げていたか、皮のひもか、何だか分かりませんが、いずれにしてもものすごい年数、ぶら下げているはずなのです。そうしなければ擦り減らない。これはもう 10 年では利かないのですけれど、全然減っていません。ひものほうは何度取り替えても、石のほうはほとんど減っていません。これを、実は見たいと思っているのですが、見られるか、見られないかは分からない、あの世から見られれば。

しかし、そういう技術がどう伝わっていくかです。この研究会でも、後で討論がありますし、どういう系統でどう動いていたかというような玉作りの集団が出てくると思います。私の(資料)では 7 ページ(図 3、玉作りの工房)と 8 ページ(図 4 上)に、玉作り関係の絵を入れておきました。竪穴住居址は、皆さん、ご存知だろうと思いますが、竪穴住居址の中で半分生活しながら、特殊な集団と言っていいたらと思うのですが、技術を持った集団が玉作りをやったのが明らかであるというもののうちの数例であります。もちろん、まだたくさんあるわけですが、ちょっと見てもらいますと、実は、普通の生活で必要のないようなものがあります。その普通の生活で必要のないというのは、壁際に特殊な穴がある。だいたい、これで見ると、4 本柱の建物です、柱のないものもあります。4 本柱で掘立柱があって、それで真ん中辺でもって炉があって、そこで煮炊きしていると、そういう時代のものがほとんどです。後になると、かまどが出てくるのですけれど、ここにはかまどのあるものは出ていません。そのぐらいの時代のものです。こういうのが出てくるのですね。これ(図 3 左下)は、島根県東忌部の中島玉作遺跡というのですが、この発掘はだいぶ前の昭和 30 年代の話なのです。

ここで話をしないといけないことをもう 1 つ。千葉県中市川で存命なのですけれど、寺村光晴先生という人がいます。この人が、本来ならここへ来て話せば一番いいと私は思うのです。玉作りの研究はその前からいろいろないことはないのですが、工作場的なものを

この人が一生懸命に探すのです。その後ろを昭和 30 年代からずっとくっ付いていたものです。私が 75 歳を過ぎてまだしゃべれるから、おまえ、話せということで話しているだけなのです。本当なら、この寺村光晴さんという人が話すのが一番いい。本も、私、書いておきましたけど（寺村光晴『古代玉作の研究』国学院大学考古学研究室報告第 3 冊、昭和 41 年 9 月ほか、資料 P2 に記載）。

この人がもともとは縄文をやっていたのですけれど、加賀片山津の発掘を昭和 30 年代に調査して、その整理をやっているときに、先輩方がみんな「俺がここ書くから」と言っていていいところ取りして、寺村光晴さんがまだ若くて、若くてとは言ってもこの人、年は食っていたのですけれど。玉作で石のかけらばかり出てきましたから、「おまえ、縄文やっているから、石の実測図は描けるだろう。これを、図面描け」って言われて、それでやったのが初めてなのですね。それをやっているうちに、「これ、面白いぞ、玉作りやるか」と言い出したら、みんなが「やめろ、やめろ」と、「玉作りやったって、大先生方がいっぱいいるのだから駄目だ」と、「玉やったって駄目だ」と。すぐそばに樋口清之先生がいたし、藤田亮策先生がいたし。

藤田先生が亡くなって、この加賀玉作がその後、大場磐雄先生の研究室へ、これが私の先生なのですから、整理途中から持ち込まれた遺跡なのです。その整理で、寺村さんは、「これは面白い」と思い始めて、興味を持ってやり始めたのが最初なのです。私は、この加賀玉作の報告書を多少手伝ったもので、写真が 1 枚逆になっているけど。「これは売れない本だから、おまえにやるよ」と言ってもらった、私はその程度からの履歴なのです。

しかし、寺村光晴さんが、「成田で掘ってみよう」と言ったときも、昭和 36 年か、37 年か、そのときが最初なのですから、それも行ってきます。その後ずっと行っているのです、なぜか、私もそばにくっ付いていて。これ（図 3 左下）が成田の、千葉県八代玉作「花内」と書いて、「はのじ」と言うのです、そのときの発掘のものなのです。これが工房ですよ。この 2 連の穴とか、これがいわゆる、玉作り特有のものなのです。それで、よく見てもらいますと、こっち側、そういう工房のセットのあるところのほうがちよいと幅広になっているのです。真四角じゃなくて、梯形的になっているのです、少し延びたりして、これが一つの特徴なのですから、そんなことが分かってきた。

千葉県のときもそうなのです、昔の学術調査というのは、何日もやっつけられない。だいたい 1 週間から 10 日で、金額も決まっていますから。このときも大場磐雄先生のポケットマネーを、あのとき、いくらもらったのかな、5 万円もらって、それで発掘に行った

のです。それで、そんなこと言うと怒られるかな？ベトナム戦争で、日本へベトナムで死んだ兵隊を送ってくるのですよ。そのときに、寝袋に入れて持ってくるのですけれど、その寝袋を洗って、上野のアメ横で売っているわけです。そのペしゃんこの寝袋で、毛布もペしゃんこの毛布で、それを買って行って、お寺の本堂に寝泊まりしてやっていた。あの時代の調査は、学生さんたちが来て一生懸命で掘っていたから、差し入れしてやろうと。生きたままのニワトリを5羽、差し入れだって言って。そのニワトリをね、寺村さん、「全部で10人いるから、これ食べねえぞ」と。「もう5羽買ってこい」って言うのです。あのね、ニワトリに足は2本あるっていうのをね、寺村さん、気が付かなかったのかね。それで、とにかく大学生で「俺がやってやる」と言って、今でもまだ九州で元気ですけど、そいつがね、首ちょん切ったのはいいけど足を放しちゃった。そうしたら、首なしのニワトリが、こうやってパタパタやって、そいつの周りをくるくる回ってね。「もう俺は食わない」になったのだけど、そんなこともありましてね。お寺でたき火と言ったって、「墓場に行けば塔婆がいっぱいあるからあれ持ってこいっ」と言って、塔婆で焼いた。そのころそんなものです。ただ、そんなこと言うと悪いのだけど、そのお寺、善勝院（ぜんしょういん）と言う、字が違うのだけど後で火事になって全焼してしまう。「あれは、ニワトリを塔婆で焼いて食ったからだ」と言われてしまって、そんなはずはないのだけどね。そんなことがあったのが、寺村光晴さんの玉作りの発掘の一番初めのころのことです。

その後、だんだん掘っていくのですけれど、この出雲（図3右下）も、その前に明治時代からもうすでに、出雲玉作りっていうのは知られていましたので、今、国の史跡になっていますけれど、このとき、もう史跡になっていたもので、そこは掘れない。「花仙山の反対側を掘ろう」というので掘ったのです、いくら掘っても出てこない。さっき言ったように、2日目、3日目で、遺構のいいのにぶつからないと、掘れないのです。掘って写真撮って図面取って、学術調査ですから元のとおり埋め戻して帰らないといけないのですから。それで寺村さん、イライラし始める。これ（図3右下）、実は崖です。崖線で、こっち側に人のうちがあって、人のうちの裏側の崖線にこれだけ出ていた。「あれを先生掘りましょう」と言って、掘ったのです。そうしたら、ちょうどいいところだけ残っていた。囲炉裏があってね。これね、勾玉を磨くための真ん中が丸くへこんでいる砥石なのです。後はほかの砥石もあったのですけれど、勾玉をこうやってやるものですから、真ん中がくぼんだ砥石になっていいのですけれど、それがいいのが出てきましてね。囲炉裏の中からは、赤メノウの勾玉が出てきた。この赤メノウの勾玉はですね、出雲大社の境内からも出

ているのですが、ちょうどこのころから作り始めているのではないかという話なのですが、それは後ほど。ここからは、勾玉の未成品も出ましたし、いろいろ出たのですが。そのときね、ご存知と思いますが、土の中に見落とししたのがあるといけないからと、土を洗うのですよ。そうしたらね、霰が降ってきてしまってね。「おい、これ玉がいっぱい増えちゃってしょうがないぞ」という話になって、寒いときでね。そういうときに洗って。それと玉が増えるのがもう1つあった。島根県の人もおいででけど、あっちの玉は片岩質って言って、薄く紙のようにはがれる石の目がある。そうすると、白玉のこんな小さな7ミリぐらいの玉がですね、下手するとはがれて増えてしまう。「何個あったか」と言われたって、増えてしまってしょうがない。考古学の何個体って言うのもね、気を付けてこうやって（眉に唾付けて）やれば、だいたいいいのです。

そういうようなのがありまして、次の8ページ目。これは富山県のヒスイ海岸のところ、「古墳時代の翡翠の玉作りを掘ろう」と言って、狙い撃ちで行ったのですが、これも出なかった。なかなか出なくてね。大変だったのですが、そのうちに出てきた。それが、この上にある図で（図4上）。これは後でまた、写真が出てきますから。その（図4）下にね、勾玉と管玉の、ある一例なのですが、始めは、石を欠いて、ある程度の形にして、それを擦って行って、途中で穴を開けて、最後にまた擦り上げていくというのが、いずれも工程であります。勾玉と、これは管玉ですが、そのほかの玉も似たり寄ったりだと思えばいいと思います。

ということで、玉作りでもう1つだけ言っとく必要があると思うのは、さっき言いました、出雲の花仙山の石は、今から学問的にいろんな分析がされるでしょうから、だんだん分かってくるとは思いますが、たぶん、関東地方まで原石で来ています。そして、関東の玉作りが作っているものもある。それから、もう1つは、出雲はずっと、途中にいろいろあるのですが、だいたい作っていますから、その玉が玉として流通してきているのもあります。さっき言ったような佐渡の石みたいなのは、外で石がないことはないのですが取っていませんし、もう、その製品が流通するしかないのですが、そういうものもあるし、それから原石が動く場合もある。それから、後で出てくるかもしれませんが、奈良県の曾我遺跡というところからは、花仙山のものだと言われているものが出ています。それで、今、最近では、和歌山県の紀の川の流域から砥石を取って、その砥石は小さな石なのですが、その紅簾片岩という石が出雲にも行っていると言っている人がいます。これは、可能性は十分あります。それから、さっき言ったような、奈良県の金剛砂が出雲に行

っていることも可能性があります。そういうわけで、モノが結構動くのですよね。私、島根県でご厄介になっていて、美保の調査をやっていたら、文書の中に、幕末に黒船が来たので、黒船見物に行こうと、家中でもって、神奈川県まで島根県から全部歩いて来るのですからね。どこかまで船で来たかもしれませんが、だいたい歩いて行くのです。そういうことをやっているのです。のんきなものだと言えはのんきなものでね。江戸時代の関東地方から伊勢参り、伊勢も大変だろうと水杯交わしながら行ったのではないか。それがのんきなものでね。「伊勢に参ったから熊野行こう」と。その上、「今度は四国行って、金毘羅参ってこよう」と言うのです。「伊勢参りに行ったのがぐるっと回って来た」、そういうのがいっぱいいるのですから。変な世界ですよ。だいたい、馬車はほとんどありませんけど、馬もいたはず、籠もあったはずなのですけれど、だいたいは歩きなのです。歩くことを苦としてない。そういう連中ですから、縄文時代以来、黒曜石であろうと何だろうと、持って歩いているのがいっぱいいる。今のことだけを考えて、今日も出張で来られている人もいるでしょうけど、日帰りしろと言われて来られた方も多いと思いますけれど、まあしかし、かつて歩きでいながらですよ、つまりそれが流通なのです。縄文の黒曜石であろうと何であろうと、それをやっているのです。

そのことを考えると同時に、もう1つ。物品の流通だけではなく、人間も動いているのです。そうやって人間が持って歩かないと駄目なのですけれど、集団も歩いている。玉作り、あるいは玉造部（たますりべ）と言っていますけれど、この玉造部、「ところを得ない玉作り」と言われています。「ところを得ない」とは、ちゃんと定住地がないということなのです。そんなこともないと思うのですけれど、集団移動している。こっちでご用があれば、はいつて行って、今度こっちでご用があれば、はいつて行って、みんな動き回っている。それが玉作り、ところを得ない玉作りだった。これも、ぜひ考えてほしいと思う。

ちょっと、浜山の絵をやって。

これ（P4 下写真）はメンバーですね、右から2人目が寺村光晴で、4番目が私です。

これが富山湾の海岸ですけれど、もう少し左のほうが、いわゆるヒスイ海岸です。ヒスイ海岸のほうへ、ここに北陸本線が通っていて、今、写真撮っているのは山の上からですが、そこにこういうふうに舌状台地、舌のように出た狭い台地がありまして、その台地の1つに、ここから発掘されたのが、この遺跡であります。

これが掘っている発掘現場です。

横から見るとこういうところで、これが舌状の台地で、向こう側も谷が入っているとい

うところ。こういうところで発掘をしました。

古墳時代、翡翠の玉作りを狙ったのですけれど、まあまあ出てきました、当たったのですかね。それで、翡翠だけじゃありません。

これは台に使った石なのです。ここら辺にあるのが、ほとんど翡翠です。これは砥石の内磨砥（うちみがきど）と言って、勾玉の中側を磨く砥石なのです。こういう、ぐちゃぐちゃと出てきた、この下から、さっきの西洋便所みたいな穴が出てくるのです。

これも横から見たところ。この青いものが目に付くかと思うのですけれど、これは翡翠じゃない。青いのは翡翠ではない。白いほうが翡翠なのです。

白く写っているのが翡翠。こうやって、砕かれた破片がいっぱい出てくるから掘れたのです。

これが翡翠でないと言ったもの。青メノウではないのですけれど、青メノウ的な石です。

これは、翡翠の1つの転石。海岸から拾ってきたか何かの石なのですけれど、それに、ここへ傷を付けましてね、ぐるっと回りこんで傷を付けて、この傷を何で付けているか、実は、ここから鉄器も出ています。鉄器も出ていますけれども。何で傷付けたか、これを割るのです。そしてある程度、火を使って割っていきます。翡翠の転石というのは、だいたい、三角っぽくなっています。

これは、勾玉の未成品で、もうかなりのところまでいっています。こっち側が腹になるほうで、これをこう削っていくのですけれど、そういう翡翠の勾玉の未成品です。

これも翡翠です。こうやって打ち欠いてね、これも転石なのですけれど、薄っぺらい石を打ち欠いて、そしてこれから磨き上げていく。

これ、今のものと同じですが、こっちが翡翠で、こっちは何か青石とか言っておきます。

工作用のピットです。こういう西洋便所、当時は西洋便所ってあんまり売れていませんからね、今はいっぱいあるけど。確かにここは水を使うのです。

横から見たところ。です。

こういう状態で出てきていたものです。

土器も少し出るものですから、その土器によって年代が分かるということでもあります。

これはまだ、須恵器のない段階のものです。

結局、これだけ掘って、これで完成ということにした。4本の柱と、勾玉作りの工房が出たので、これで終わりと言ったのですが、北側のここがちょっとへこんでいるのですよね。これが気になったので、

そこを掘っていたら、コマなのです。錐でこうやって開けるのですけれど、そのときのコマ、滑車なのです。これが鉄器です。薄い鉄なのですけれど、穴が開いていまして、全体の半分ぐらいです。これは砂岩の砥石です、これをね、土の中に立てるのです。立てて、ここで勾玉の腹の方を擦るのです。

こういう小さな砥石もあります。このピットから管玉がポロポロ出てきたのです。

これが炉です。炉の中からはほとんど何も出ません。

で、こうやってへこみ始めた。ポロポロ管玉が出てきた。全部で 90 何個が出てきた。

いくら掘っても掘っても出てくるのです。当時のお墓ではないかってことになったのですけれど、まあそうではなさそうだとということです。

結局、ここまで出たら、いろいろ土器も出ましたし、砥石も出たし。それで寺村さんの報告書を見てもらえば分かるように、この上にどんな構造物があったか、この柱のそれぞれの傾斜とか、太さとか、傾斜角はどうだとか、いろんなことをやっています。そしてこれが、管玉を作った工房であることが初めて分かったのです。

ということで、基本的にここでは勾玉と管玉を作っていた。そして、勾玉は翡翠と、もう 1 つはさっき言った青石を使っている。管玉の方は、碧玉と言いたいところなのですが、碧玉じゃなくて滑石であります。

これが最後の写真になりました。何とか掘り上げて、終わりにできたのですけれど。

もうまとめなければいけないので。実は、日本列島はグリーンタフの地帯でして、北から南まで、グリーン石材があります。それだから、彼ら、青い石を好んで使ったのだろうかという言い方。それともう 1 つは、彼らが霊（魂）の色はどんな色だろうかと考えたときに、青い色をしているのではないかと考えています。それがあったために、さっき言ったように、紫の翡翠もありますし、黄色っぽい色もありますし、いろんな色がある。それから、花仙山へ行ってみますと、その穴の周りには捨てた石がいっぱいある。その捨てた石は黄色い碧玉だとかね、赤いのはあんまりないのですけれど、白いのとか、いろんな色のものがあります。その中で、一番青の濃いのだけを使っているのです。これが、1 つのやり方だと思います。

後になりますと、赤メノウの勾玉などが出てきます。関東では、茨城県の金砂郷（かなさごう）というところで、赤い勾玉を作っていますが、それらは古墳時代の後期になってからなのですが、たいてい、首のところに勾玉を 2 つくっ付けているのだと思います。勾玉というのは、横面から見るのではないのです。正面から、しっぽが前へちよいと突き出

すように重心がなっていないと、本物ではないと言っていいぐらいのものです。こうやってひもでぶら下げれば、しっぽは前に出ます。というようなのが考えられていますけれど、それを、彼らは何だと思っていたか。たぶん、自分たちの魂的なものだというふうに考えていたかと思います。

実は、本当は話せと言われたことが話せなかったのですけれど、後で（資料を）見てもらいますと、長野県長野市の玉依姫神社の児玉石神事というのがあります（資料本文、4. (2)）。その中に入っているのは、子持勾玉が親玉で3個入っているのです、それをはじめとして、何千という数がある。だんだん、江戸時代から知られていたために、毎年神事で数を数えているのですけれど、だんだん増えてくる。そういう、玉が増えるという信仰なのです。全国にはまだほかにもあるのですけれど、そこが典型的なものです。

もう1つは、玉は生きていう、玉というか石なのですけれど、それは生きていうものがあります。これは、全国に民話や何かの中には出てきます。これも1つ、日本人的な発想であります。

これは私が勝手に作らせたガラスの子持勾玉なのですけれど、子持勾玉って、古墳時代のだいたい5世紀から6世紀にかけてなのですが、玉が玉を生むというのを、実際に形に作っている。玉が玉を生む、勾玉が勾玉を生むというのは、全国で今、500個ぐらいあります。朝鮮半島に9個ばかり出ていますが、これらは、江戸時代から愛玩品として有名ですから、偽物もたくさんあります。これが、いわゆる玉が玉を生むというのを、古墳時代に実際に作ったものの形です。大きさもだいたいこのぐらい、一番大きいので15~16cmしかありません。小さいものは、うんと小さいものもありますけれど。これを何に使ったか。分かっていません。増えるということ祈っている可能性があります。これが、おまつりの祭祀遺跡を中心に出ています。古墳から出ることもあるのですけれど。

基本的に、玉の信仰というのは変なものですね、人間が作ったものだということを知っているのです。日本人は、そこの辺りはさっきも出てきた鏡の信仰もたくさんありますけれど、鏡だって、人間が作ったって分かる、神さまが作ったとは言わない。あるいは、剣も人間が作ったものだってことをよく知っているのです。よく知っていながら、それが信仰の対象になっていくのです。剣・鏡・玉が日本列島で一度に揃ったのは、一番初めは、銅剣と銅鏡と勾玉なのですけれど、これは福岡県の吉武高木遺跡、だいたいB.C.220~230年ごろのものが、そのときに鏡・剣・玉が揃っています。しかし、本当に信仰の対象になっていくのは古墳時代だろうと思います。そして全国で祭りに使われていくのが古墳時代



の、4世紀から5世紀にかけてのころだろうと思いますが、その中で、青い石だということと、それから、勾玉はたぶん、人の魂的なものと見ているのだろうということでありま  
す。単なる牙の模造ではなく。あるいは、中国から来たものとは言えないだろうと思いま  
す。

そんなことで、時間がありますので、終わりにします。